愚見抄

特別
へ4
8131

貴
へ4
8131
<2007-116>

早稲田文庫

愚見抄

誹諧はつまとあつへき物ともなき振舞し
のはるゝはのとらふ所よろしからんとすへきと
の約しは宗にも不堪のものく上手の
やうとやゝ秀逸の姿とはよく誹は
道の式くたりてしゐて云事みつ
れへし何ま道は上つかたになれたる人常
へは面の世て事の道理とも紛れへし

色しかく志はくまかしりてゆかは志振人よ
發明する事もみえたる凡夫の風さまよ
一ころ誹をはなつゝ狗公のゝ秀も祢
かゝしへ哉姿と思へはひとらはかゆく志
哉るもあり事して仍也達老のよろしかれは多
めへふいりて面白きはこれしきま心得く
あるへうす甚句多よへりて心家はいさゝ
み哉事は宗すゝありけるかうへは取るて

付勝よきこゆへし生めかの不堪のことよ坊ん
人は当世古風とてしも姿を去とやうしよ見
まつ付ふへもしや一の存寄して侍へし
又これ本よは代々の勅撰とも手鑑侍ましはう
付て拌と見るゝつゝてまうけ梅へも也
無く書き案たく書ては有かゝる事て侍
へし我これありて無してありし侍けり
よしよ書くしはるふよつ案て年こ

月こよ花兆のことへつけて事めきて拵侍り
う付ともけは無かなりすし侍し
事にてやゝうし物への時さや此つなり哥
は面白して又とまゝ付侍やうく〳〵哥道は
かりてこそしまり事みつ付とそて巨文てと
いましめつ付付し当くしもの詞もと
耳つ紙井みよとやつ生得を言いひし人こさ
と葉はゝしもへつ修行くさやれとも葉

とは字をしといひて単に作る本文字
あまたつかへにつね事はしむ人しまよく
作りたる程にあやまる事にておほきや
庭訓とえぬかいふにて而也金吾の説として
の祈つ孫に人の倚によこいつふとて義とし
もてすゝ路によこいふ事何ことへえてりによ
か倚の字をすゝ路によこしとや外相の書記
の説にすゝ路まし訓ける事もある猶しうすとや

残人ら路ハ井いうここれ西訓の用捨
ハ音のまゝに井とやう様と字せきうしく
すゝ路ハ此ハミいふ事ハ甚おほし井事
にしても井ハいふる井ゐうとかい
難波へ若犬ふてやま屋きりてすゝ路は袖の露
これ井ハ上句也あつしいさてやとハいつま志て
すゝ路まよあり、あしよハすゝ路とハいえん
事なえん所にてらゆへハ大をしりたまへし

あしく作りしハさく竹志のやうにやつれ
えんにかゝしき氣とみの人ことにするとい
ひ人まじりやく所詮も作る凡才と共と
いま吉かよくりこいへとも語といつか
つ猶よ耳翔て詩くらさなすへし句
とへハ本ハたやの中山とやせとて東のへ
ゆハ迄りん分よいさよの中山とも
かうしこれもやさしとい同韻やう体

句くハこれよハ詩るへうに一といなく
三のすゑは作とり志なへし作者の心姿よ
あまくの風姿あり十躰とて書りくも
家とよまてはさて作るやうに詩躰とて
も作り詩前なる十躰ことに相違なきや
三五記よくりもいさらあてゝ作り
十躰とやいハ幽玄躰長高躰見一躰
事一躰麗躰濃躰見之一節面白躰

見様躰 拉鬼躰これも強くきゝ様は
申さぬくきこえとまて候はゞ又此外の
躰は又有知すへき事あまた候へとも
いまの写古躰 京曲躰 哀躰 有心躰 幽
雲躰 廻雪躰 理世撫民躰と申事あり
みにくし 猶のさ長風躰へよとおもふ人の有様にはさは
これこそ写古躰と申めへ古物しらくなう
おのつから有心様也 定家卿のことようや

まつ様しも有心躰と申か 其十躰の
中にも麗躰にて候へ古やうなとにいはゞ
かへりとくへし 麗躰みるゝ平懐て
家につきくたけあるかまとたえしも有
は有心躰と申ハかやうへも 雲廻雪躰と
申は幽玄の有まさりての姿也 幽玄也
有心中にはまさりても雲廻雪といはれ
すこしかりも幽玄とて其様あるへし

いまの舞ハ朝雲とて作へありや文選高
唐賦云昔者先王嘗游高唐怠而晝寝
夢見一婦人曰妾巫山之女也為高唐之客
旦為行雲暮為行雨朝々暮々陽臺之
下旦朝視之如言故為立廟號曰朝雲
同洛神賦云河洛之神名曰宓妃髣髴
兮若輕雲之蔽月飄颻兮若流風之
廻雪肩若削成腰如約素是非女也此京極

とハよろこひあへむしろのは中へ舞りや京曲
中比時よつ奏ていつまてまても其興を
しるへうくつらしうそ京曲舞しハかなふへ
舞理世撫民舞こ中ハなを心舞の精類て
作り異朝堯舜我国延喜天暦のこと舞
ほうくみよみそつけふ笛姿たるへし此帝ハ
一國の尊主第一人秀須たりける心舞の言
ハ和漢のむかしなくこすへ舞神もかなふ

世はみちへたりくるたるへしそこの体を
うしも理世民体といふ体やありこれ
古の人灌頂のやうなるにてくわしくは人の世
は又つきのきんとする小ちかよ古今の調子
まなひをいれは有すけくよりたつへき体よ
しそ物哀体これはことよ好士ことにおもひは
へてたるぬきこやあはれなりゆくきしそ
たつ人の体はまなふすへきまてたへしす人

て大事の体は物哀体の古今の中にまゝあり
や
あはれも秋の露にて哀なりけれ業平も露のあはれ
古今にては今の田邑山のことは業平かりしは忠岑かく
小野小町家風はあはれありやうにてこの一体はあはれとみゆ
これによりて物見もていかにてしやかなしく見え
後をんことに明暮はみやこに安すく袖もぬれつよか
さりとて三代の桐火桶の古今との

給しかば清たゞにはさて給ふ名人さて秀逸歌は
いと大事まで給ふ様と晴の所の事なり
此前に晴の所にて然思ひしに所をも言
ましは天下の事たるべし
桜咲宰と宰も喜多高砂の山風はしりしゆるくて
住吉の松と秋風吹くはおもしろうかはおもしろき
興は世吹く宰しみ住吉の松の世はあらじ浪
業て給へしと遠白ぞ松不思儀にて

給ふ未練のほとかくりしかよまかりしき所なれ
何浪の国よりの浦ならふるこゝに歌よまし
我ぞとよむの月の秋よ菜吹く月とよむ
余出て所出のある事もかはりて
ありて給ふ山の前は思詠の中よりて
こうはりなる様にやまいおしゆる
たりへし何りける事と申は
日くの遠はあなたの風さおもしろき風情

あはれなる葉にかゝり物ゝ哀よ秋風よ秋世を常く
艶ありて侍へしつ捨てしき詩を吟して詠
すまし哥や詩ハ心ゆゑぬくすまして物
まて侍りて蘭省花時錦帳下廬山雨夜
草庵中これ詩とそ三文卿ハ詠せられ侍し
古にも毎秋風涙旅館の客人暮雨魂これ又
すぐれたる事にして感を動すたくひ也白氏
文集の中よ大要の巻にありけり詠よ相見

世のことゝ古人申したり
いかなるあさましき翠の帳の中よりもすゝしき拾
たゝまことの錦の帳原きさらにやまふ捨かひかりなり
これハ此葉とも哥も心あらん筆の跡よしへ
哥や物つきさ前ふハ
君世にしるへきたつよ詠そへて伝吉風あり
さる詩を拾てそへし申人ハ吾桐傳への
あやまりやあさましき事に金葉集に

猶まこと言ふことやうのけりこそ本實と
中は物よろしくへしといふにて年又十の餘の
上臈は衣冠ゆるしやかまはず物は物別
よる宿を乙くへとてとゝ家てあへきおもしやに
筋と申まうしに陣は申すにつき致さに志をそなたなきによりかき
思ひの限しこ田とそまへきしあすこえとしし
これ又大事御弓箭の御へのかねしへつ候らむ
此沙汰也

嵐吹く山の村しぐれたちもそむる雪に猶なん
家隆卿の詠よいこれもまた候らむたくひなき
ぬしやもしろきすたれへしまても侍能
は生死の堪能にて候まさていかすり物あ候
みな深くはしく候まほり毎のいつ家にも見
ものかりにて金書つけよ侍能は
おもしろしまてめならへしこれこそ申
候まのゆりとや田畑へしく代々の勅撰

のなかまで万事の様とは己達の名をあらはし
古今集は初へのかきあつめ錬磨の人はかはらず
さまはつりて始終よくしのいて萬世
の風体は初へのこたしは斟酌ありて碁に
しても千載集みとはこと様ふへ碁様や
侍らん雖儀みも習しらじとすへしば
あくこの道と思つて寝食はわすれ様く
朝夕心よかけて心をみ付べし あ

ゆきとゞこほりて長途よはぬらんと
をしまず修行の功をつみて一度
すては雖の上手にならずとも
はやくまはぬこれも事みのまことはやく
よりとりくむしりて公労するばかりて
業とすべし家業との碁に限りて
庭にかよひて碁時を好みて業とする事
あるべからず退屈して遊びは中々道の

陵廢となる事もし作り侍らんおりハ京
京前として、ハみな稱として詞前めこまて
此志字をなる字を定又首まて横と
すゝめて後の絶ゝりかつてるこへ稱とりこゝ
有りもへ有なりつへ侍しいは侍さたて
まとりてもいあるの事さるハ明無
すの事のゝ有まわすこ中ハ仏さめ
しやいのいむまみいまてもまよ又

いよく大事まなり侍るあるハ家ハ無つさき
みとか有ばき無の先賢の遺訓と無
ことなりみやうをとしまハ詞の取捨て
作り詞まこりてあるゝ無の稱へ作しき詞
の事まや侍る有詞をこ一句まつ付稱
せつまさ詞とハ又一首ましをても
も梅とさゆうさにしまて我へこまやゝなりの
詞を常にゝ有りこし兼ましまいませつ走

は言葉すは見て不足しや判断し難く
わそ見えり多くすりつまき葉こそませて
しも無しいへは詞よはすへきり多く
此文へきと何れは為くつ字うりして
詞の筆跡雌雄は葉こゆへ葉りや未練不
堪の筆也あるにしそ随まへは詞ふすら
てうけら様ぬ言まく随まつ候しく
葉く也しく一用捨也かること肝要也とく

たはり様とも公のぬくわかくたさめ
為言はら様よゆりくや、は様まし又
つれむ様とまて詞の吉悪ともえ紀まへ
為て公詞の二は鳥也鯛車の描也しく
なりへし一つ字ては字ふへの掛しとあ
まりまつ候ぬくらまもしとてうら葉く
よ何事といつよかといおはゆの様ぬすら
うたゆあしもしへすくしくいぬ

哥道之上手なれはとて詞をいひのこ
してそおはしめ哥と云あさかやま
まし思ひを權してもしいつすたる之
詞への外にはしまつはめあきく詞を
みはくまよつへ哥之正路をうかかひて
志眼は常府にか事て哥道を継ハ
行て恵よ源底よいたるへしいたり
哥道ハいつたる道をまなふへしいりて

よろしみしりかとは継に身をゆはく
をしむへ哥をや我のつくしむへ哥事こゝにハ
かゝり前のさくるこれかと明かぬ暮
夕暮秋みこゝふ事人しまよこそよ
むハ何事そやゆふくれの秋といひ明か
ぬ暮こしまて春のへたしやかてゆき
難しくすむしまハ花にそ待へ夕猿
こそおもつく云言論云く春の明かの

穐乃夕くれ迄出てしそ我こゝ出迎なくは
これみしをかこしすゝむそくなるきこ
ゆかし我れ道すて心すゝ待るべ
こすうたすめへしこのはさびしみらむ
好士みなりてこれは面らつりけりすまじき
くは手ふかせんみすくるのあはと云べし
我たくひもゆかは
夕されは門田の稲葉音信て芦のまろやに秋風そ吹

霞わかすむやまかせさて雪さへにかの春の月
後の前句と申すを梅か香の我よ本にたちかへ
我ぬらしは其の句をまねとも此句はあまりは
めてたしとて我かせて作りこの作者の
よき作りもあすましいとはよ給し
堪能のうへはさて道を両ものはつけまし
ありし世西上人かともれ事ききゆくやは
事あるとつけし両道の明鏡たるまし

よ務つ野に世れ侍のかけはいへく涼しくなりぬ気
津の國の難波は昔は名も芦房秋篝風情をかし
此本は風雅なりすこしも違ハぬ時風骨文
うつせやそ出て思ひ懐しうりみつとへやまと人
山里よ幸世いと安かりける梅くゐつ昔さらし
今やかはい出しも残りけん逢へん人とて嬉しからぬ
丈姿はまするふへ行て鎌倉右大臣の言椋
おそへはく人丸赤人とをいらこそて萬世不

相應の達者こそ学ひ
もとめ世のやまとうたはいふことのはへあまたたかひ無きはなし
たこ称ちかひ義てられいはしかりの興を小鳴よ渡れたる
これはまことにめかしてそうもすめ萬世をり(?)へし
萬葉集の中に書まりへうとくらかもよ
つりしは右府の言覧は人とかよそ道と
物して寂すなやしおけりく佛の此起不
啚の人よかしまよおそ涵へ横之

愚意はそれかよ通達して高様の高上にありて
志をもちにはいへ歌は清輔臣又これ言のみそて
侍へし是は人あしへと孫はいりの世をし
かなふへきなりはんこの言をまあり
そて其のあらはいとみな誹は和國の
風にて異人の耳よらうへやらく
うら歌くにとりきこへてあまは
りさかすやしにらましとすへしこそり

それより志うる様しやまの事ここと志あらく
は家侍小ものみ歌詠のよ意志くて懐旧
の誕生事の景をしに世にもてなく
しそ朝夕はよしいらをさましくく道の
在實よりかかへ作詩の事りゐらり
歌これ何とみきやすなる様とく道の骨
関なりへしんれめりつまてゐ事はあう
しみ様てく家の明規とあらは歌て道中

世にへうしともかなしく

建保四年拾月十三日　終切手

遺老藤原朝臣定家

黒付紙数十八枚白紙五枚也

四十八

藤原朝臣定家卿筆

愚見抄　一部

佛眼院藏

從建保四年至天保十四年星霜六百廿八年